

日・朝交流史における青磁象嵌筒形高麗茶碗の考察

慶應義塾大学 徐 景淑

朝鮮半島から請来された茶碗を日本では「高麗茶碗」と称している。しかし、高麗時代(918-1391)に作られたものは少なく、それらの多くは朝鮮時代(1392-1910)に焼造されたものである。日本に伝世する高麗茶碗の種類は多く、17世紀日本からの注文によって釜山窯で作られた「御本茶碗」まで入れると、その数は膨大なものである。その中で「雲鶴」「狂言袴」と呼ばれる一連の筒形茶碗がある。これらは高麗時代の青磁の様式であることから、14・15世紀の作として知られてきたものである。しかし、その器形や文様などは、朝鮮半島の陶磁史の上では特異な作行きを示すもので、それらの中には17世紀御本茶碗に先立つ16世紀頃の注文茶碗と考えられるものも含まれている。そこで、高麗茶碗の考察には日本における中近世の陶磁器受容に関わる問題がある。本発表では日本に伝世した筒形茶碗を中心に、これらを韓国陶磁史上に位置付けることから始め、その分析による製作時期の見直し等についても検討する。その上で高麗茶碗の請来時期と経緯及びその背景について、日・朝交流史の上で考察してみたい。さらに、日本国内遺跡から出土した資料を通して日本の人々の美意識の変化にも影響を与えたはずの政治や社会的状況について言及する。

まず、作品の位置付けについては、高麗茶碗と朝鮮半島における遺品との比較を通して、日本伝世筒形高麗茶碗の器形が朝鮮半島の筒形とは異なることを指摘する。このため、14世紀高麗末期の象嵌青磁と15世紀の粉青沙器の各編年基準になる作品を取り上げ、それらと日本伝世筒形高麗茶碗との比較を行う。その結果、それらが14・15世紀の青磁とは作行きが異なることが明らかになると考える。次いで、17世紀の御本茶碗との比較を通して、日本伝世の筒形高麗茶碗とその作行きが類似することを指摘するが、日本伝世筒形高麗茶碗には17世紀御本茶碗でみられるような自由さや個性的趣向がみられない。そして高麗青磁の再現に努めたことが認められる点などから、その製作年代は15世紀前期と16世紀半ば頃に編年するのが妥当と考えられる。

日・朝交流史からは、日本の対朝鮮貿易商人にとって、15世紀前期と16世紀半ば頃は、対朝鮮交易による利益が減少した時期といえる。それで、その解決策として朝鮮の特産品の中で陶磁器に目を向けるようになったと推測される。日本国内出土の発掘資料や伝世品を検討してみると、高麗青磁の場合は12・13世紀の正統的な象嵌青磁が輸入されてきていた。ところが、16世紀には、象嵌青磁でありながら茶の湯における実用性などの要素と時代的要求が加わった、本来の象嵌青磁とは異なる日本向けの高麗茶碗が輸入されていたと考えられる。さらに、朝鮮における高麗茶碗の製作時期と請来時期、そして茶会記などの記録から知られるその受容の時期がそれぞれ異なる点に注目する必要がある。注文製作の可能性等を考慮すると、青磁象嵌筒形高麗茶碗の請来時期はかなり特定されてくる。その日本での出土遺物は各時期別に異なる性格をみせるが、16世紀半ば以後の出土遺物には個性的な遺物が集中している。そこにみられる好みの趣向が優先された個性の表現から、その美意識が変化し、さらに茶の湯をたのしむ階層も変わってきたことがうかがえよう。